

陶彫家寺内信一に関する先行研究とその問題点

Preceding Studies and Problems about Ceramic Sculptor Shinichi Terauchi

西村 佳菜子

Kanako NISHIMURA

崇城大学大学院芸術研究科博士後期課程
Doctoral Course, Graduate school of Art, Sojo University

キーワード：寺内信一、陶彫、工部美術学校、近代日本彫刻史、西洋美術

Keywords : Shinichi Terauchi, Ceramic Sculpture, School for Craftsmanship and Art, Modern Japanese Sculpture History, Western Art

Summary

Shinichi Terauchi (1863-1945) was a sculptor who used earthenware as his main material. Additionally, he was an art (craftsmanship) educator most of his life at the ceramics production studio. However, very few papers and books reference him. Furthermore, most of the descriptions in those papers and books are only a simple introduction to him.

As an early stage in research on Terauchi, the purpose of this paper is to resolve the present circumstances and problems by analysing preceding studies.

First, in Chapter 1, I survey the life of Terauchi and confirm his achievements.

Next, in Chapter 2 Section 1, I present records and references about him and his works in local history research books, then, in Section 2, I present papers aimed at Terauchi or papers which feature comparisons of him.

Finally, in Chapter 3, I clearly present the issue of how a researcher of modern Japanese sculpture and ceramic sculpture should work by analysing the preceding studies referenced in Chapter 2, in an effort to survey problems and indicate resolved and unresolved points related to the subject matter.

はじめに

稿者は塑像制作者であるが、陶を用いた立体作品やインスタレーション作品を見たことで陶彫に興味を持った。そして日本における陶を用いた彫刻の起源を探る中で、寺内信一（1863-1945年）（図1）の存在を知るに至った。寺内は、主に陶や土の素焼きによって作品を制作した彫刻家であり、また、人生の大半を全国の窯業地で技術者の育成に捧げた美術（手工）教育者でもある。しかし、寺内に関する論考や彼について言及した書籍は僅少である上、記述の内容も多くは簡略な功績の紹介に留まっている。寺内は諸教育施設において西洋美術の教授や窯業史研究に情熱を傾けたため、制作した作品数は作家としては少ない。しかし、寺内の緻密で和風とも洋風とも評し得る作品群は、彼の意図したことではなかったにしろ、日本美術、とりわけ日本の「彫刻」の近代化の特徴や芸術観、ならびに概念の成立とその変遷を、如実に物語っている。

そこで本稿では、寺内信一研究の初段階として、まず、寺内に関する先行研究を洗い出して分析することで、寺内研究の現状、ならびに問題点や未解明事項を明らかにしたい。方法としては、I章において寺内信一の生涯を概観し、彼の功績の確認を行う。次いでII章において先行研究の洗い出しを行う。II章1節では、まず寺内が活動した諸地域における郷土史研究書や地域史研究書に記された彼に関する記録や言及を取り上げ、続いてII章2節で、寺内を研究対象とした論考、あるいは彼に関する記述が比

較的多い論考を挙げる。そして最後にIII章において、II章1節、2節で挙げた先行研究を分析し、問題点の抽出や、既に解明されている事項と未解明事項を整理することで、今後、稿者や日本近代彫刻研究者ならびに日本陶彫研究者が取り組むべき課題を明確に提示したい。

I. 寺内信一の生涯とその業績

それでは、まず寺内の生涯から見ていくことにしよう。

寺内は、文久3（1863）年、周防国吉敷郡宮野村大字宮野下村桜畠（現在の山口市桜畠）に、農業を営みながら村長も務めていた寺内甚三の次男として生まれた。文久3年は、鎌倉幕府以来続いた封建制度の終焉を予感させる事件や内戦が多発した年であり、彼の生家の近隣も内戦地となっていた。周防国は長州藩内の東側に位置し、その北には倒幕の志士や思想家を輩出した松下村塾のある萩藩が位置していた。長州藩は倒幕思想の温床として朝敵の烙印を押され、京都での「八月十八日の政変（1863年）」⁽¹⁾によって追放されたり、幕府軍による長州征伐（1864、1866年）⁽²⁾を受けたりしていたが、結局、大政奉還によって幕藩体制は幕を閉じた。そして、伊藤博文を初代内閣総理大臣とした日本初の内閣制度が誕生して、近代化に向けた新制度が次々に発布されたことは、史実が示す通りである。

寺内の幼少期はこのように幕府の解体と明治維新という時代の激変と重なっていたが、彼は、維新後に近代的諸学校が全国に設置されると、私塾を経て小学校へ入学し

た。そして修学後は小学校の助教を務めていたが、父親が事業に失敗したため13歳で兄と共に上京するに至った。続いて、上京後に住んだ下宿先の主人の勧めで、日本初の専門的美術学校である工部美術学校⁽³⁾予科へ入学することになった。寺内は金銭的に苦勞していたため、同美術学校でも官費制をとっていた彫刻学科に進み、イタリアから招かれたお雇い外国人ラグーザ (Vincenzo Ragusa, 1841-1927年)⁽⁴⁾ (図2) から西洋彫刻の素材や技術⁽⁵⁾について教えを受けた。ラグーザを含むお雇い外国人によって輸入された諸概念や教えの中でも、特に美術としての「彫刻」概念の導入は、芸術家ないしは美術家を職工としてしかみなしてこなかった日本では画期的なものであった。寺内は、日本の地で日本人として初めて西洋人から彫刻に関する専門的技術や概念を教わった藤田文蔵 (1861-1934年) や大熊氏廣 (1856-1934年) といった工部美術学校出身の数少ない彫刻家たちのうちの一人であったのである。

明治15 (1882) 年に工部美術学校卒業後、寺内は皇居御造営事務局建築課に御用掛として約1年勤務したが、その後は、彼が身に付けた技術は全国の窯業地で応用されることになる。すなわち、工部美術学校の同輩であった内藤陽三 (1860-1890年)⁽⁶⁾ (図3) に、彫塑の教師として愛知県常滑市の美術研究所に招かれたのを皮切りに、瀬戸の高等小学校手工科や瀬戸陶器学校、佐賀の巴里万国博覧会陶磁器出品協会、有田工業学校、中華民国の湖南高等工業学校、愛知県西浦町の東京帝国ホテルタイル製造所、愛媛県砥部工業徒弟学校に招かれ、65歳で

退職するまで息つく間もなく窯業の教育者として、また技術者としてそれらの地で精力的に活動していくのである。

次に、各赴任地での寺内の主な業績について言及すれば、まず、常滑美術研究所 (1886-1888年在職) では、自身を招聘してくれた内藤とともに、従来の木型や素焼き型では困難であった陶磁器の複雑な浮彫の複製を、土原型の石膏型による成形法を教授することで可能にさせたことが挙げられる。また2人は、ラグーザの教えをそのまま踏襲し、同地で初めて解剖学を教授したり、彫塑を指導したりした。現在、愛知県立常滑高等学校旧百年館に保管されている数多くの生徒の遺作からは、彼らが解剖学をよく理解して、豊かな表現力を獲得していたことが見て取れる (図4-1、2)。このようにして2人は、陶製品の大量生産の能率を向上させるとともに、写実的な表現方法を教授して、常滑窯業の発展に多大な貢献をした。さらにこの時期寺内は、日本初と考えられる西洋彫刻風のテラコッタによる半身の女性裸婦像 (図5) も制作している。

次いで、明治31 (1898) 年に佐賀県の巴里万国博覧会陶磁器出品協会に技術者として招かれ、従来困難とされていた黄色に発色させる釉薬の調合方法を伝授した。また、有田工業学校校長就任後 (1903年) は、前校長の納富介次郎 (1844-1918年)⁽⁷⁾ が焼成に成功しなかった直焰式石炭窯を倒焰二階式石炭窯⁽⁸⁾ に改築して焼成を成功させた。さらに、明治37 (1904) 年のセントルイス万博で学生の製作した作品が金賞を受賞したのをはじめ、明治43 (1910) 年にはロン

ドンで開催された日英博覧会で生徒作品が名誉大賞を受賞するなど、寺内は窯業教育の成果を内外に示して実績を重ねた。こうして同校の評判は高まり、有栖川宮^{ありす がわのみや たね ひと}裁仁殿下をはじめ、松岡農商務相や堀田通信相、小松原文相、大浦農商務相らの相次ぐ視察を受けるようになった。

さらに、大正5（1916）年に陶材製造技師として招聘された東京帝国ホテルレンガ製造所では、建築家のフランク・ロイド・ライト（Frank Lloyd Wright, 1867-1959年）⁽⁹⁾が要求した黄色い発色のレンガ製造を有田窯式の焼成技術⁽¹⁰⁾では成功させられなかったものの、帝国ホテル用の種々のタイルの製造計画を担当し、製造所やそこに設置する製造機械等の諸設備の整備に努めた。

技師就任の7ヶ月後、寺内は常滑の窯業者である伊奈初之丞^{い な はつ の じょう}に技術顧問の職を託して有田へ戻った⁽¹¹⁾。そして翌年から砥部工業徒弟学校に教諭となり、後に校長となって65歳で退職するまで同校に勤務した。退職後は佐賀県有田町の李參平⁽¹²⁾旧住居跡に居を構えて隠居生活に入り、研究者としての側面をより一層強めて、日本初となる本格的な近代有田磁業史である『有田磁業史』（1933年）（図6）を発表し、高い評価を受けた。また、その他の地域の磁業史も数多く執筆した⁽¹³⁾。このように寺内は晩年の多くの時間を研究書の執筆に費やしながらも、自宅に建てた窯⁽¹⁴⁾で《白磁観音像》等の陶彫制作を行うという悠々自適の生活を送り、82歳で没した。

以上、大まかにではあるが、寺内の足跡を概観したことで、彼が日本近代の美術教育史や窯業史を語る上で欠かすことが出来

ない重要な人物であることが分かった。

続いて次章では、彼に関する先行研究を概観することで、その問題点や未解明点等を指摘ないしは明確化したい。

II. 寺内信一に関する先行研究とその問題点

「はじめに」でも述べた通り、寺内信一を研究対象とした研究論文や文献、書籍は僅少である。彼が勤務していた教育機関や地域の研究団体が編纂した教育史や学校史、地域史等を紐解いてみても、多くは、彼の名前や役職名、在職年月、功績などを僅か数行記しているにすぎない。

本章では、まず1節において発行年の古いものが集中している郷土史研究書ならびに地域史研究書中に見られる寺内に関する言及について概観し、次いで彼に関する記述が比較的多い研究論文を検討した後、両者における先行研究の特徴や問題点を明らかにしていく。

II-1. 郷土史研究書や地域史研究書に見られる寺内信一に関する言及

それではまず、寺内が活動した諸地域の諸団体が編集・発行した郷土史や地域史に見られる寺内に関する記録や言及を見ていくが、工部美術学校彫刻学科を卒業した後、記念碑等の塑造彫刻を手掛けていた彫刻家たちは、後にオーギュスト・ロダン（François-Auguste-René Rodin, 1840-1917年）の影響を強く受ける彫刻家であり、また美術批評家でもあった高村光太郎（1883-1956年）によって「稚拙の技を公

衆に示し」ている「素質無」⁽¹⁵⁾い人々であると評され、その影響が多かれ少なかれ現代まで続いているため、積極的に調査されてはこなかった。そのため、寺内や同時代の彫刻家、彫刻界に関する研究論文は少ないが、郷土史や地域史には、寺内の各赴任地における活動や功績が記されており、それらをつなぎ合わせることで、彼の生涯を跡付けることは可能である。

郷土史研究書に寺内が紹介されたのは、管見の限り、常滑青年会に所属していた瀧田貞一の著書『常滑陶器誌』が最古のものであろう。同書の発行は明治45（1912）年であるため、明治21（1888）年における常滑美術研究所の閉鎖とともに寺内が同地を去ってから24年後の発行ということになる。同書は、常滑焼の発祥から明治末期までの沿革、ならびにその発展に寄与した人物や窯元、養成施設の功績を簡略に記述しており、常滑美術研究所の元所長であり、教員でもあった内藤や寺内に関する記述も、特に詳細という訳ではないが、見い出される。例えば、「例言」には「…第二章にありては故内藤横井の両氏を載せ第三章に於ては寺内芳田飛鳥井の諸氏を加へたり我陶界の功績者なればなり…」（下線、ルビは稿者による）と記されているほか、内藤や寺内、さらに横井惣太郎⁽¹⁶⁾の顔写真（図7）も掲載されているので、寺内を含む3人が功績者と見做されていたことは間違いない。同書の「美術研究所と石膏模型」という項目⁽¹⁷⁾では、さらに、内藤と寺内が、ラグーザから学んだ「動植物の粘土彫刻および石膏模型等の法」を教授し、「石膏を以て型を製するの法を得たり爾來精巧綿密の品を容

易に制作し得るに至」るようになった功績が讃えられている。また「寺内信一」の項⁽¹⁸⁾からは、寺内らが、ラグーザが日本に導入した西洋彫刻の基本である人体解剖学や塑造をそのまま常滑美術研究所の教育に取り入れたことが分かる。

昭和11（1936）年に中島浩氣が発表した労作『肥前陶磁史考』は、佐賀県有田付近の窯業地帯に関する本格的な近代陶業史の研究書であり、有田の陶業の歴史を知る上でバイブル的な存在となっているが、同書には当然ながら巴里万国博覧会や、有田工業学校に関する項目中に寺内に関する記述が見られる。例えば「巴里博覧会出品協会」の項⁽¹⁹⁾には、「明治三十一年は、来る三十三年に開催さるべき、佛國巴里大博覧会への出品製作の為、有田の窯業者は、多額の地方費補助を仰ぎ、佐賀縣知事竹内維績を会長に推して、佐賀縣陶磁器出品協会本部を、有田へ置くことゝ成った。而して当時愛知縣技師たりし納富介次郎を技師長に聘し、絵画には東京の荒木探令（ワゲネル創始の朝日焼の描画者、後年狩野氏を襲ふ、昭和六年一月九日卒七十四歳）、金澤の和田重太郎（石川縣山代の人、絵画及画案に長ず）彫刻には、山口縣人寺内信一（伊太利彫刻家ラグーザ門下）圖案には徳見知敬（納富介堂門人）等を技師として、各出品者製器の完成を指導せしむることゝなり各技師は出品製作の陶家を巡回督勵することゝなつたのである」（下線、ルビは稿者による）とある。また、「寺内信一の初代工業学校長」の項⁽²⁰⁾には「明治三十七年四月十一日（三十二年前）寺内信一、有田工業学校初代の校長に任命され、従来陶画、

製品、模型の外に商業及圖案の二科目を増設した。彼は山口縣吉敷郡宮野村の人にて、半月は其號である」(下線、ルビは稿者による)と書かれている。その他「黄色と薄墨色」の項⁽²¹⁾には「後年の発見中にて、特に発色困難とされし黄色は、明治二十九年美濃の中津川村より産出する茶金色(フエロガソナイトに似し礦石にて、明治三十一年佛國巴里博覽会出品協会の折荒木、和田、寺内等の技師に依つて、始めて有田へ齎された)が発見されしが、近年酸化チタニウム、錫酸カルシウム、石灰酸化亜鉛等の調合を用ふると稱せらる」(下線は稿者による)とあり、寺内の技術面における功績も記されている。また同書は、全体的に有田陶業の歴史的事実の列挙に終始してはいるものの、末尾にあたる「後記評論」では、当時の窯業界の陶磁器の質ならびにその技術、さらに品評会や博覧会が抱える諸問題が論じられており、有田窯業界の同時代の重要な人物であった寺内が当時どのような状況に身を置いていたのかを知ることが出来る。

中島浩氣の『肥前陶磁史考』刊行から33年後の昭和44(1969)年に、今度は愛媛県伊予郡の砥部町教育委員会が『砥部焼の歴史』を刊行した。同書は、同地で出土した弥生式土器の解説から始め、発刊当時までの砥部焼の材料や生産方法を紹介し、さらには砥部焼の発展に寄与した人物たちを顕彰したものであるが、ここにも、寺内が砥部工業徒弟学校の教員や校長を勤めながら、砥部焼の品質向上の技術伝道だけでなく振興策の考察にも努めたことが記されている。同書には、寺内の経歴紹介とは別に、「思

い出す三先生のことども」という項があり、同項目中で、砥部に居住していた寺内と実際に会談した執筆者の阿部公政(松山高等予備校校長、元愛媛県教育長)が、会談の内容や寺内の人柄を懐かしんでいる。

寺内の有田における重要な功績の一つに、陶磁器制作に際して有田で従来禁止されていた天草陶石の使用の解禁が挙げられるが、昭和60(1985)年に有田町史編纂委員会によって刊行された『有田町史 陶業編Ⅱ』には、それを証拠立てる寺内の報告が掲載されている。それは、第七回西松浦郡陶磁器品評会(1902年)で審査長を務めた時の寺内の審査報告であり、同書のその同品評会に関する項に掲載されている。つまり寺内は、明治34(1901)年の品評会では有田周辺の窯元が従来使用していた泉山の陶石を原料とした陶芸品のみを出品させていたが、明治35(1902)年の品評会では「昨年は天草の原料を使用した出品はこれを拒絶したが、今回は決してこのような事はなく、各種の原料を使用した出品が多い。これは、とりもなおさず有田の門戸開放ともいふべきことで、これによって有田焼は競争場裡において打ち勝つことができるであろう。」⁽²²⁾と言って、泉山の陶石だけでなく、天草陶石の使用を認めているのである。同書中、寺内の審査報告が記載されているのは第六回、第七回、第十回、第十一回であり、いずれにおいても寺内は有田窯業の発展に対して建設的な発言を行っている。

次いで昭和62(1987)年には、愛知県常滑市の中学校教諭であった吉田弘氏が、常滑窯業界において偉業を成し遂げた鯉江方寿(1821-1901年)の生涯を綴った『常滑

焼の開拓者 鯉江方寿の生涯』を刊行した。同書は、常滑美術研究所開設にあたり、自身の家の一工場を教室として開放し、さらに工部省大技長であった宇都宮三郎を介して皇居御造営局の職を失った寺内と内藤2人を研究所の教員として受け入れるなど、その開設と運営に積極的に協力したことを、方寿の功績の一つに挙げている。また同書は、上述の瀧田貞一の『常滑陶器誌』には記されていなかった同研究所開設までの詳しい経緯を明らかにし、寺内らの指導内容とその功績を、技術面や生産面、ならびに芸術面から分析して讃えている。さらに同書によれば、度重なる高潮の被害から鯉江家の墓を含む共同墓地を守るために別の土地への墓地の移設が行われた際、方寿は鯉江家の墓を自ら新しく陶土で作し、当時研究所の教員であった内藤と寺内も、陶製唐獅子を載せた4本の飾り柱を制作して同家の墓の台座やその周囲に配置したという⁽²³⁾。ちなみに同書には、移設された墓の写真と戒名の写真が掲げられている(図8)。

平成18(2006)年、INAX ライブミュージアムは、元帝国ホテル衣糧部主任であり、帝国ホテル煉瓦製作所の工場長でもあった牧口銀司郎が日本クリーニング界社発行の業界紙「日本クリーニング界」に昭和32(1957)年7月号から昭和41(1966)年まで21回にわたって連載した回顧録「帝国ホテルのスタレ煉瓦」を、1冊にまとめて非売の冊子として同じ題名で刊行した。同書は帝国ホテル旧ライト館建設のために فرانク・ロイド・ライトから依頼された黄色いスタレ煉瓦(図9)を完成させるまでの紆余曲折を回想したものであるが、その中

には寺内が技師として同製作所に招聘され、有田に戻るまでの経緯が詳細に描写されており、同地での寺内の生活の様子や技師としての意識の高さを窺うことが出来る。例えば「夜分になるとお酒も煙草ものまぬ私を相手に独りで一献きこし召し、お得意の謡曲、隅田川のさわりをうなりその都度一時間ほど拝聴を余儀なくさせられたものであった。」⁽²⁴⁾という牧口の回想からは、寺内の生活の様子が分かり、また、牧口が寺内に窯の焼成について助言をした際、寺内が「君は素人のくせに何をいうのかね、そんな職工なんかのいうことなどは絶対に信用ができぬ、技術上の事柄に関しては一切嘴を入れてくれては困る」⁽²⁵⁾と発言したことから、寺内の窯業技術に精通した技師としての自負や自信が窺われる。

II-2. 寺内信一に関する先行研究(研究論文)

1節では郷土史や地域史研究書に見られる寺内に関する言及を概観したが、続いて、寺内に関する記述が比較的多い研究論文を見ていきたい。

金子一夫氏と伊沢のぞみ氏共著の論考、「工部美術学校における彫刻教育の研究(1)」(1992年)は、当時の資料や卒業生たちの回顧録等を整理することで、明治9(1876)年の工部美術学校開校から明治16(1883)年1月の廃校までの沿革や授業内容を明らかにしている。同論文は、伝統的な職工の「彫り物」から、明治後期の荻原守衛の作品を初めとする彫刻家による「芸術としての彫刻」表現の出現に至るまでの、日本彫刻界における近代化の過程の中間に

あたる工部美術学校の存在に焦点を絞った点で重要であり、今日の近代日本美術史、ならびに美術教育研究の欠落を埋める論考のひとつと言える。明治政府が西洋風の建築装飾の職人を養成するために工部美術学校を設置してイタリアから外国人を招聘するとともに、ヨーロッパの画材や彫刻材料、模写のための見本帳や古代ギリシャ彫刻を複製した石膏像などを輸入して、日本の地で初めて西洋人による西洋美術の教授が行われたことは、近代日本美術史、美術教育史からは切り離せない重要な出来事である。同論考は、そうしたお雇い外国人による授業内容や学校の様子を示す資料のひとつとして、寺内が残した随筆『重要参考筆記』（1936年）を挙げ、同随筆の内容を適宜引用して紹介している。一例を挙げれば、「大理石彫刻物は、上塗り志て彩色する場合は別として石質を完全に現はす彫刻物には接続は禁物である。曾て山崎兼吉といふ雇石屋が、約一年もかゝつて荒彫り志た洋婦人の半身像は、後にラグーザ氏が鑿を取って仕上げにかかり、余も揉み錐のロクロ綱を手伝つたことがあつたが、其婦人の左の頬のポイントが只一点深過ぎた。是は石膏の原形にコンパスのを仕掛けて荒彫りのとき兼吉が一点間違えて三ミリ程深く切り込んだから、其点迄磨り下げると頬がこけていけない、そこで其の部分の穿ちて共石を磨り合わせてのちにチース糊で埋め込んで磨り合わせたがチヤンと痕跡が見えて居た。」⁽²⁶⁾とあり、同記述からはラグーザの下で山崎兼吉という石屋が下請け作業を行っていたことや、ラグーザが石膏原型から大理石にコンパスで凹凸の形を写し取

る技法⁽²⁷⁾を採用していたことなどが分かる。しかし、同論考には寺内自身や寺内の作品に関する十分な記述は見出されず、また、研究自体、資料研究としての色彩が濃い。

続いて平成6（1994）年に発表された、同じ金子氏と伊沢氏の論考である「工部美術学校における彫刻教育の研究(2)」は、工部美術学校彫刻学科の卒業生について調査研究したものである。同研究は、同科の卒業生38名の内、主要な6名の生涯をそれぞれ概観し、工部美術学校卒業後の動向や業績を端的に記述している。調査対象となったのは大熊氏廣、藤田文蔵、佐野昭（1865-1955年）、菊池鑄太郎（1859-1944年）、寺内信一、内藤陽三である。これらの中で彫刻家として生涯活動できたのは大熊と藤田のみとされている。大熊は、確かに西洋彫刻が下火となった時代を肖像彫刻家として自力で乗り切っている。また藤田は、卒業後、岡倉天心やフェノロサが中心となって新しい日本美術創造のための学校設立の準備を行っていた文部省の図画取調掛に勤務した後、東京美術学校（現在の東京藝術大学）の塑造科や女子美術学校（現在の女子美術大学）等で西洋彫刻を教え、明治38（1905）年以降は彫刻制作とクリスチャンとしての活動に専念したという。その他の寺内を含む4名については、おそらく卒業後の生涯の大部分を彫刻制作とは別の仕事に従事して過ごしたため、同論文は彼らを彫刻家と捉えていないように思われる。

そうした4名のうち、寺内に関する節では、主に常滑（および瀬戸）教員時代（1883-88年）と有田教員時代（1898-1911

年)の業績が簡潔に述べられている。さらに同論考は寺内を教育者としてだけではなく、研究者としても捉え、その研究書や草稿、雑誌に寄稿した論考等についても言及している。同節中で最も注目すべきは、寺内が土を材料とした彫刻を制作するに至った経緯を、寺内の手記である『重要参考筆記』に拠って分かり易く記述している点で、特に「当時大理石は材料として板ものしか扱われてなく、かつ斑のないものを得るのが難しかった⁽²⁸⁾」という記述の紹介は、他の文献には見受けられない。例えば吉田朝子氏の論考、「ラグーザの教育とその影響—素材・技法の側面から」(2010年)は、日本における西洋美術の材料の代用となり得る素材のラグーザによる発掘や研究の足跡などを論じたものであるが、同論考には当時日本に存在していた大理石の質に関する記述は見られない。また、金子氏と伊沢氏は、寺内に関する節を「寺内の近代日本の実業教育に果たした役割は、納富介次郎に次ぐもの⁽²⁹⁾」という言葉で締め括り、寺内を日本窯業の近代化を推進した重要な人物として位置づけるとともに、西洋彫刻の感覚や技法を窯業教育に導入した寺内を輩出したことは工部美術学校彫刻学教育の大きな成果であったとして、工部美術学校の意義や、同校が果たした役割についても正当な評価を行っている。

金子氏と伊沢氏が上掲論文(1)を発表した翌年、経済学者である山田雄久氏によって「寺内信一翁の有田磁業史研究—寺内信一著「有田磁業発達史」の紹介—」が『帝塚山経済・経営論集9』(1993年)上に発表された。経済学者による寺内論は、管見の

限りこれが唯一のものである。同論文は、近代日本が西洋技術導入によって工業化していく中で、一般大衆に支持された模様や形態を大量生産する中、下級普及品であった陶製品製造の発達とその歴史に着目したものである。そしてその中で特に、有田の陶磁器技術の発展過程を跡付けた寺内の有田磁業史研究を取り上げている。山田氏は、寺内の生涯を概観するとともに、有田における材料や技術、機械の導入、また西洋に対する製品の販路開拓の流れを、寺内が著した大小さまざまな著作を整理、分析しながら明らかにしている。同論考中で取り上げられた著作は、『尾張瀬戸・常滑陶磁誌』(1937年)をはじめとして、『有田の磁器』⁽³⁰⁾、『瀬戸陶器史』⁽³¹⁾、『有田皿山雑記』(1930年)、『有田古陶銘款集』⁽³²⁾(1931年)、「肥前陶工伝」⁽³³⁾、「有田磁器沿革史」⁽³⁴⁾、「有田磁器の発達史(有田磁業発達史)」⁽³⁵⁾(1932年)、『有田磁業史』(1933年)、「柿右衛門」⁽³⁶⁾(1938年)、「半月漫録」⁽³⁷⁾にまで及んでいる。さらに同論文は後半に「有田磁業発達史」の全文を再録し、最後に寺内の「有田磁業研究には産業技術史的視角が元来備わり現在でもその成果に注目すべき点多」く、「陶磁器業史研究のなかでとりわけ工業技術に視点を据えた著作として大変貴重」であると評してもいる。寺内に関する記述は、明治期における西洋美術の導入を論じた文献に数多く見られるが、同論文のように、寺内を産業開発史的視点から取り上げ、彼の磁業史研究を歴史の中で検証したものは他にないため、貴重な論考であると言える。

次いで平成11(1999)年には、日本美術

教育史の研究者である、先にも論考を取り上げた金子一夫氏の労作『近代日本美術教育の研究 明治大正時代』が発刊された。同書は美術教育史の方法論を考察するとともに、明治期から大正期にかけての美術教育の変遷を跡付けたものであり、同分野の研究者だけではなく、日本美術史の研究者にとっても欠くことが出来ない重要な研究書である。また同書は、寺内の著作ではなく、作品に注目し、それらを日本美術史の文脈に関連付けた最初のものと考えられる。同書の第二章の「二 工部美術学校の設置と教場」と「八 彫刻学科の教育(1)概観」、「第四節 彫刻学科の卒業生」の部分には、伊沢氏と共著の前掲論文、「工部美術学校における彫刻教育の研究(1)」および「工部美術学校における彫刻教育の研究(2)」と内容が重複している部分があるが、新たに書き加えられた箇所もある。「寺内信一と内藤陽三の陶彫」という節は、まさに新しく加筆された部分であり、ここには寺内と内藤が常滑美術学校に赴任し、陶彫の制作に至るまでの経緯が綴られているが、同節において金子氏は、江戸時代の伝統的な彫り物から荻原守衛の作品に代表される近代彫刻になったという従来の考え方を否定し、両者の間に工部美術学校卒業生の作品をはじめとする彫刻群を置くべきだと主張している。

金子氏はまた、常滑で寺内が制作した作品《裸婦像》を「日本人をモデルにした裸体彫刻として最も早いもの」と推測する一方で、作品の用途⁽³⁸⁾ (図10) を考慮すると、純粋な裸体彫刻であるかどうかは検討すべきだとも述べている。平成7 (1995) 年に

美術雑誌『芸術新潮』⁽³⁹⁾へ寄せた評論でも、同氏はほぼ同じ見解を示しているので、4年の間、《裸婦像》が「純粋な彫刻」であるか否かの検証は行われなかったか、あるいは結論が出なかったと推測される。しかし、金子氏が寺内の《裸婦像》を見い出して寺内自身と彼の作品の重要性を示したことで、明治期の日本彫刻史研究の欠落の一部の解明の契機が与えられたことは間違いないと思われる。事実、田中修二氏が編集した『近代日本彫刻集成 幕末・明治編』(2010年)では、工部美術学校の存在意義とその卒業生たちの生涯と功績に関する記述が挿入されており、寺内に関しては、これまで殆ど紹介されてこなかった晩年の小作品まで取り上げられて、それらに考察が加えられている。特に、執筆者の一人である吉田朝子氏は、寺内の陶彫の小作品《深川せい子像》(図11)の概説において、陶土を用いた立体物制作の長所と欠点を指摘し、《深川せい子像》やその他の作品で採用された正座の多様なポーズを造形方法と照らし合わせて考察している。同書は江戸末期の1850年前後から明治40 (1907) 年に第一回文展が開催されるまでの日本彫刻界の西洋美術の受容の様子と彫刻界の変遷を、緻密な調査と分析によって跡付けているが、文献や作品が数多く残っている東京美術学校関係者に関する記述や資料の掲載にかなりの紙幅が割かれており、寺内に関する記述は少ない。しかし田中氏が「近代日本彫刻史は、まだ若い分野であるといえる。一つの研究分野が学問として成立するためには、ある程度の層の厚みと拡がりが必要であるとすれば、この分野はようやくその

出発点にある」⁽⁴⁰⁾と述べているように、近代日本彫刻に特化して論じた最初の研究書として、同書はきわめて重要な基礎的文献と言える。

さらに、寺内信一に関する記述は少ないものの、上述の幾つかの論考とは異なる視点から、寺内や常滑美術学校に言及している論考を一つ挙げておく。平成9（1997）年、東京大学創立百二十周年記念として発行された『学問のアルケオロジー』に収載された西野嘉章氏の論考「医学解剖と美術教育「脇前」から「藝用解剖学」へ」がそれである。同論考は、日本の芸術分野における人体解剖やそれに関する専門書等の輸入や普及について論じたものであり、美術作品の制作には解剖学的な知識が必要であるという西洋的な考え方を日本に最初に導入したのは内田正雄（1839-1876年）⁽⁴¹⁾であろうとしている。また、工部美術学校において骨学や筋学など基礎的な解剖学が教授されたが、助手であった大熊が描いた《人軀解剖之図筋肉之部》の軸装墨図等は、彫刻家が造形美術のために学んだそうした解剖学のおそらく国内最古の記録であると推測している。さらに、卒業生である内藤と寺内が常滑美術研究所において解剖学を教授した証拠として石膏製浮彫《筋学像》を挙げ、ラゲーザがイタリアから齎した解剖学が、内藤や寺内を通して明治16（1883）年には地方でも講じられていたと指摘している。

遺漏もあるであろうが、以上、重要と思われるか、寺内についての記述が多く見出される研究論文や郷土史研究書ならびに地域史研究書を発表、発行年順に挙げて、そ

れらの内容について概観、確認した。

Ⅲ. 先行研究の分析ならびに問題点の抽出

次いで、Ⅱ章1節、2節で取り上げ、内容を概観した先行研究について分析し、今後寺内信一やその芸術を考察する上での問題点と、既に解明されている事項を整理することで未解明事項を明確にしたい。

Ⅱ章1節において郷土史ならびに地域史研究書を概観して言えることは、いずれの研究書も地域に関する事実を列挙した窯業史の紹介に留まっているということである。つまり、寺内の紹介を含む最古の文献と考えられる『常滑陶器誌』（1912年）をはじめとして、以後数年から数十年の間隔を置きながら刊行、発表された『肥前陶磁史考』（1936年）や「帝国ホテルのスタレ煉瓦」（1957-1966年）、『砥部焼の歴史』（1969年）、『有田町史 陶業編Ⅱ』（1985年）、『常滑焼の開拓者 鯉江方寿の生涯』（1987年）は、表1に整理した通り（表1参照）、それぞれ概要や寺内に関する言及、紹介内容は異なるものの、当該地域の窯業全体に関する歴史をまとめた郷土史研究書であり、それらにおいては、寺内は、西洋彫刻の概念や技法を紹介、導入した者とされているものの、多くの功労者のうちの一人として位置づけされているにすぎない。

郷土史や地域史研究書における紹介に対し、研究論文における寺内に関する本格的な言及や考察の開始は、表2に整理した通り（表2参照）、平成4（1992）年の金子氏と伊沢氏による「工部美術学校における

彫刻教育の研究(1)」から始まると言える。同論考では、寺内が工部美術学校において当初西洋画志望であったにも拘らず、彫刻学科に入学した理由が明らかにされているほか、予科ならびに彫刻学科在籍中の寺内の進歩表(成績表)が紹介されているので、彼が受講した授業や習得程度が理解される。さらに同論考は、寺内が水戸の寒水石やイタリア産の大理石を用いてレリーフ制作等を行ったことも明らかにしているが、彼に関する記述は、当然ながら工部美術学校時代に限定されており、ラギーザの指導がその後の寺内にどのような影響を与えたのかまでは考察するに至っていない。

続いて3年後に発表された「工部美術学校における彫刻教育の研究(2)」(1995年)では、金子氏と伊沢氏は、寺内の生涯を詳述する中で、寺内が同校卒業後、皇居御造営局に就職したにも拘らず、建築方針が変更されて失職し、常滑美術研究所に赴任するに至ったことや、同研究所で石膏型技法や版画、動植物の塑造を教授したことを明らかにしている。また、有田に現存している遺作2点の図版を掲載している他、現存しない2点の遺作についても文中で言及している。しかし同論考は、常滑美術研究所と有田工業学校に関する記述に多くの紙幅を割いており、寺内から影響を受けた生徒らの作品については言及していない。

山田氏の「寺内信一翁の有田磁業史研究」(1993年)は、寺内の遺著である複数の有田磁業研究書の概要と、それぞれの発表形式の紹介に終始しており、寺内の陶彫作品については全く言及していない。

その2年後に美術雑誌『芸術新潮』上に

掲載された金子氏の寺内の《裸婦像》に関する特集記事では、同作品が「巻き上げ法」という技法で制作されたことが明らかにされたが、制作方法の紹介としてはまだ不十分と言える。というのも、薪窯での焼成は、自然灰釉が作品の肌に付着してしまうため、不燃性の物で覆い、肌を保護した可能性が高いからであり、また、石膏型の技術を持っているにも拘らず、「巻き上げ法」を採用して制作した理由が解明されていないからである。金子氏はさらにその4年後に『近代日本美術教育の研究 明治大正時代』を刊行しているが、寺内に関する箇所には、伊沢氏との共著である上掲論文と『芸術新潮』の記事と重複しているためここでは割愛する。

続いて平成22(2010)年に刊行された田中氏編集の『近代日本彫刻集成 幕末・明治編』では、寺内の《裸婦像》と小作品2点、並びに技法の紹介、言及がなされたが、同書は、「表現方法の交流」という小節において沼田一雅⁽⁴²⁾については、その鑄金や陶彫作品における原型制作の例を挙げているのに対し、寺内の陶彫制作については作例を紹介しておらず、両者についての比較検討も行っていない。

また、西野氏の「医学解剖と美術教育」(1997年)は、常滑美術研究所の生徒であった平野六郎の日記に、寺内らが講義した解剖学、画学、幾何学、遠近法の講義内容が記されていることを明らかにして、西洋美術が地方に浸透していく過程を知ることが出来る。しかし、他の論考と同様に、講義を受けた学生たちの作品については言及しておらず、解剖学の導入が常滑窯

業にどのような影響を与えたのかまでは考察、解明していない。

結語

以上、先行研究を概観し分析することで、先行研究において既に解明されている点と未解明点が明らかになった。ここで今一度未解明点を列挙しておけば、①ラゲーザの西洋彫刻の教授による寺内の作品への影響に関する考察や、②陶彫制作において彼が採用した技術に関する調査が挙げられる。その他、③未だ誰も論じていない常滑における西洋美術の導入前後の陶彫作品の比較や、④工部美術学校出身の寺内の作品や陶彫観と、陶彫の祖と謳われる東京美術学校出身の沼田一雅の作品や陶彫観との比較、検討等が挙げられる。また、⑤寺内が彫塑と解剖学等を教えた研究所に残っている生徒作品の調査や紹介、ならびに寺内の生徒への影響の分析等も未解明事項として挙げられよう。

近代日本彫刻史研究の歴史はまだ浅いが、これまで概観してきたように、金子氏や田中氏をはじめとする幾人かの研究者によって調査・研究が進められ、それは寺内信一を含む工部美術学校関係者にまで及んできた。しかし、人生の大半を窯業教育に費やし、作品数が少ない寺内信一を単独で研究対象とする研究者は皆無である。稿者は、寺内の遺著や遺作、ならびに寺内周辺の陶彫家や弟子たちの作品等を調査・分析することで、Ⅲ章で明示した問題点や未解明事項を解明し、寺内自身やその芸術、芸術観などをより鮮明にしていきたい。それはま

た、日本陶彫史の黎明期にささやかな解明の光を当てることにも通じていよう。

[脚注]

- (1) 文久3年8月18日、会津藩や薩摩藩を中心とした公武合体派が、長州藩を主とする急進的な尊皇攘夷派を京都から追放したクーデター事件。
- (2) 幕末期に2度にわたり、幕府の長州藩征討が行われた。元治元(1864)年、禁門の変を起こした責任追及のため幕府は長州藩に征討軍を派遣したが、その時下関に英、米、仏、蘭の連合艦隊が来襲したため、藩内は危機に瀕した。そのため長州藩は征討軍と戦わず、禁門の変の首謀者を処刑した。藩内強硬派の高杉晋作らはこれに異を唱え、奇兵隊を組織して恭順党を一掃し、幕府に反抗した。このため慶応2(1866)年に幕府は再討したが、薩長連合に連敗し、幕府の権威は急速に失墜した。
- (3) 明治10~16年の間、東京の赤坂区葵町工部省構内の旧鍋島藩邸日本屋敷内に、国家有用な美術家または技術者を育成することを目的として設置された。イタリアから画学教師としてフォンタネージ(Antonio Fontanesi, 1818-1882)、家屋装飾教師としてカッベレッティ(Giovanni Vincenzo Cappelletti, 1843-?)、彫像技術師としてラゲーザがお雇い外国人として招聘され、画学科、彫刻学科、予科の学生たちに西洋美術を教授した。
- (4) 1841年、イタリアのシチリア島パレルモ市近郊生まれ。少年時代に素描や鑿のみの使用法を学んだ。1860年ガリバルディの愛国義勇軍に参加し各地で戦った後、ヌンツイ

オ・モレルロ経営の塑像学校へ入学し、同時に昼はサルヴァトーレ・ロ・フォルテに古典彫刻の素描を、夜はアカデミア・デル・ヌードで学び、アカデミックな彫刻教育に熟知していた（金子一夫『近代日本美術教育』1999年 149頁）。明治5（1872）年に日本派遣彫刻教師選抜美術競技会で首席合格し、来日が決定した。明治10（1877）年、彼のモデルとなる清原玉（1861-1939年）と出会い、明治15（1882）年、彫刻学科の廃止を受け、清原玉とその姉夫婦と共に帰国。日本再訪を希望したが叶わず、85歳で自宅にて死去。代表作に《日本婦人》（1880年）、《ガリバルディ騎馬銅像》等がある。

- (5) 予科では幾何学、プロジェクション、幾何学法飾、造家図、論理影法、実地影法、論理実地遠近法を履修し、彫刻学科に進学後はヨーロッパの図画手本、石膏像、静物、動物の写生、彫刻の実習では古代ギリシャの石膏像を油土（プラスターノ）や石膏で模刻し、上級生になると大理石彫刻を選択した。石膏や油土、大理石はイタリアから輸入された素材である。
- (6) 万延元（1860）年、金石（博物）学者、白野夏雲の三男として生まれ、縁家である内藤家の養子となった。札幌農学校で学んだ後、工部美術学校に入学し、第一等で卒業。卒業後は寺内らとともに皇居御造営事務局建築課に務めたが解雇され、常滑美術学校に赴任、西洋美術を教授した。常滑美術学校退任後、内務省土木局からの留学生としてベルリンに赴き、彫刻家オットー・レッシングに学んだが、肺結核となり、帰国途中、香港とシンガポールの間の上で

死去。享年30歳。確認出来る遺作は、《鯉江方寿像》（1884年）、《亀井茲監像》（1888年）の2作品。

- (7) 天保15（1844）年、小城藩（現在の佐賀藩の支藩）士で神道家であり実行教祖の柴田花守の次男として生まれ、父より日本画を学んだ。16歳で儒学者の納富六郎左衛門の養子となり、長崎で南画を学んだ後、幕府勘定吟味役の根立助七郎の従者として長州藩の高杉晋作らと共に上海に渡り、貿易調査を実施。明治6（1873）年には、ウィーン万国博覧会政府随員として渡欧し、ボヘミアのエルボーゲン製陶所で伝習生として製陶器の製造を学んだ。同所で納富は塑像や石膏等の製陶技術を習得し、翌年フランスのセーヴル製陶所を視察。その後東京で江戸川製陶所を開き、日本で初めて全国の青年陶工に石膏鑄込み等の製造技術を伝授。また、工芸品の量産体制を整えるため、工業、工芸学校の創立など教育活動にも従事。創立に携わった金沢工業学校（現・石川県立工業高等学校）、富山県高岡工芸学校（現・富山県立高岡工芸高等学校）、香川県工芸学校（現・香川県立高松工芸高等学校）、佐賀県立有田工業学校（現・佐賀県立有田工業高等学校）のそれぞれに工芸科を設置した。晩年は東京で絵画と彫刻をたしなみ、大正7（1918）年に没。
- (8) 窯の内部は二階層になっており、下部は石炭の燃焼によって高温になるため施釉した本焼き用の製品を入れ、上部に低温の素焼き用の製品を入れ焼成する窯。
- (9) 1867年にアメリカのウィスコンシン州に牧師の父ウィリアム・ライトと母アナの長男として誕生。アドラー＝サリヴァン建

- 築事務所で才能を見込まれ、26歳で独立、有機的建築の建築家として有名となった。不毛な時代はあったが、91歳で没するまで精力的に建築家として活動し、近代建築界の巨匠と称される。代表作に、グッゲンハイム美術館や、カウフマン邸、帝国ホテルなどがある。
- (10) 焼成の最終段階で低温になったとしても窯の扉を開けず、ゆっくり蒸し焼きにする焼成方法。
- (11) その後、伊奈製陶は大きな発展を遂げ、INAX（現 LIXIL）を設立するに至った。
- (12) 忠清道金江（現・忠清南道公州市反浦面）に生まれた。文禄元（1592）年、豊臣秀吉が朝鮮出兵を行った際、肥前の領主であった鍋島直茂が日本に連れて来た陶工の一人。元和2（1616）年に有田東部の泉山に良質で大量の白磁石を発見し、日本で初めて白磁器を製作。これが有田焼の起こりとされ、現在彼は有田の「陶祖」として陶山神社に祀られている。
- (13) 寺内が執筆した未発表の草稿は、直系の寺内家に数多く存在している。
- (14) 没後、彼の窯は李参平旧住居跡にあやかっ「李荘窯業所」と改名され、現在は、日本のみならず海外からも注文を受けて、現代的なデザインの陶磁器を製作している。
- (15) 高村光太郎編「現代美術の揺籃時代」『中央公論』中央公論新社 1936年 260頁
- (16) 明治5（1872）年に、愛知県名古屋市に士族の子として誕生。明治30（1897）年に東京高等工業学校附設工業教育養成所窯業科を卒業し、同年8月に常滑工業補習学校の校長となった。当時の常滑工業補習学校の設備は不十分であり、横井は設備の充実に尽力。また、同校が明治33（1900）年に常滑陶器学校として組織を改変した後も、校長を務めながら自ら教鞭を執り、常滑における石炭窯の普及に努めた。明治35（1902）年、病気のため31歳の若さで死去。
- (17) 瀧田貞一 『常滑陶器誌』常滑町青年会 1912年 28頁
- (18) 瀧田貞一 『同上』85頁
- (19) 中島浩氣 『肥前陶磁史考』新潮社 1936年 696頁
- (20) 中島浩氣 『同上』708頁
- (21) 中島浩氣 『同上』564頁
- (22) 有田町『有田町史 陶業編Ⅱ』有田町史編纂委員会 1985年 211-212頁
- (23) 吉田弘『常滑焼の開拓者 鯉江方寿の生涯』愛知県郷土資料刊行会 1987年 251-252頁
- (24) 牧口銀司郎 『帝国ホテルのスタレ煉瓦』INAX ライブミュージアム 2006年 22頁
- (25) 牧口銀司郎 『前掲書』35頁
- (26) 金子一夫・伊沢のぞみ「工部美術学校における彫刻教育の研究(1)」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）42号』茨城大学 1992年 122頁より孫引き。
- (27) 現在の星取り法にあたりと考えられる。
- (28) 金子一夫・伊沢のぞみ「上掲論文」89頁
- (29) 金子一夫・伊沢のぞみ「上掲論文」89頁
- (30) 昭和5（1930）年、『有田皿山雑記』に再録。
- (31) 『尾張瀬戸・常滑陶器誌』に再録。
- (32) 小野賢一郎編『陶器全集』に掲載。
- (33) 未刊行、寺内家所蔵。
- (34) 『有田磁業史』と改題し、発表。
- (35) 未刊行。
- (36) 昭和13（1938）年、『伊万里焼・鍋島焼・

柿右衛門』に収録。

- (37) 未刊行。
- (38) 金子一夫氏は、作品の右臀部に寺内によって「皴襞研究所用／明治十七年春三月／周防之美術学生／寺内信一作尾州金島山／不竄堂 信在尾州号稀念」と銘文が刻まれているため、本体は、作品に着物を着せ、その襞の構造理解のために使用されたのではないかとしている。
- (39) 金子一夫「日本の裸体彫刻第1号!?常滑のテラコッタ・ヌード」『芸術新潮』新潮社 1995年 82～85頁
- (40) 田中修二編『近代日本彫刻集成 第一巻』国書刊行会 2010年 6頁
- (41) 江戸生まれ。幕末の頃、長崎海軍伝習所で航海術と測量法を学び、オランダ人教師から語学、世界地理、西洋数学を学んだ。オランダ留学の後、慶応2（1866）年には軍艦開陽丸に乗って世界一周を果たし、その経験をもとに記した地理書の『輿地誌略』は明治の三書と称される程人気を博した。維新後は明治政府に招かれ、大学南校の官吏となり、辞官した後は翻訳著述に専念したが、病気のために夭折。
- (42) 明治6（1873）年に陶芸家の沼田丈助の三男として現在の福井市に生まれ、幼少から粘土に親しんだ。18歳で上京し竹内久一の指導下で東大寺法華堂や戒壇寺、興福寺の仏像を模刻。それと同時に岡崎雪声から蠟型技法を学び、日本美術協会展や彫刻競技会で受賞を重ね、明治29（1896）年に東京美術学校助教授に抜擢された。また、京都の陶芸家である錦光山宗兵衛から陶磁器による彫刻制作の指導を依頼されて、陶彫制作を開始。当時、同校校長であった正木

直彦や農商務省の協力を得て、2度にわたってフランスのセーヴル陶磁器製作所に外国人としては初の研修生として受け入れられ、原型制作や型取り、成形法、焼成法を習得（1回目の留学ではロダンと交流）。また、日本の風俗に取材した婦人像や鳳凰、唐獅子などの原型をセーヴルに寄贈し、その功績に対して、フランス政府から芸術勲章を受けた。帰国後は東京美術学校鑄金科の教授となったが、陶彫研究は継続、複数の陶磁器試験場で後進を指導。昭和21年にオリエンタルデコラティブ陶磁研究所を創設したほか、昭和26年には日本陶彫会を結成し、昭和29年に日本芸術院恩賜賞受賞。同年6月5日没。

[参考文献]（発行順）

- ・ 瀧田貞一『常滑陶器誌』常滑町青年会 1912年
- ・ 高村光太郎編「現代美術の揺籃時代」『中央公論』中央公論新社 1936年
- ・ 中島浩氣『肥前陶磁史考』青潮社 1936年
- ・ 砥部町教育委員会『砥部焼の歴史』砥部焼歴史研究会 1969年
- ・ 有田町『有田町史 陶業編Ⅱ』有田町史編纂委員会 1985年
- ・ 吉田弘『常滑焼の開拓者 鯉江方寿の生涯』愛知県郷土資料刊行会 1987年
- ・ 金子一夫・伊沢のぞみ「工部美術学校における彫刻教育の研究(1)」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）42号』茨城大学 1992年 107～126頁
- ・ 山田雄久「寺内信一翁の有田磁業史研究—寺内信一著「有田磁業発達史」の紹介—」『帝塚山経済・経営論集9』帝塚山大学

1993年 45～57頁

- ・金子一夫・伊沢のぞみ「工部美術学校における彫刻教育の研究(2)」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学，芸術）44号』茨城大学 1994年 77～96頁
- ・金子一夫「日本の裸体彫刻第1号!?常滑のテラコッタ・ヌード」『芸術新潮』新潮社 1995年 82～85頁
- ・西野嘉章「医学解剖と美術教育「脇前」から「藝用解剖学」へ」『学問のアルケオロジー』東京大学 1997年
- ・金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治大正時代』中央公論美術出版 1999年
- ・牧口銀司郎『帝国ホテルのスタレ煉瓦』INAX ライブミュージアム 2006年
- ・株式会社 INAX『F.L.ライトがつくった土のデザイン 水と風と光のタイル』INAX 出版 2007年
- ・田中修二編『近代日本彫刻集成 第一巻』国書刊行会 2010年
- ・吉田朝子「ラグーザの教育とその影響—素材・技法の側面から」『明治の彫塑 ラグーザと萩原礫山』芸大美術館 2010年 61～66頁
- ・三好信浩『納富介次郎』佐賀城本丸歴史館 2013年

[図版典拠]

- 図1、4-6、9-11：稿者撮影。
- 図2：『明治の彫塑 ラグーザと萩原礫山』芸大美術館 2010年 45頁
- 図3：金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治大正時代』231頁
- 図7：瀧田貞一『常滑陶器誌』冒頭
- 図8：吉田弘『常滑焼の開拓者 鯉江方寿の

生涯』251頁

[謝辞]

寺内信一とその関係者の遺作調査および拙稿執筆にあたっては、以下の機関、諸氏に遺作の閲覧と写真掲載の許可を頂くとともに、御教示と御協力を頂いた。この場を借りて御礼申し上げる次第である。

李荘窯業所代表取締役寺内博信氏、深川製磁株式会社相談役芸術室長深川巖氏、佐賀県立有田工業高等学校セラミック科金岩昭夫先生、とこなめ陶の森資料館同学芸員中野晴久氏、愛知県常滑市教育委員会事務局生涯学習スポーツ課・同主事小栗康寛氏

表 1. 郷土史・地域史研究書の概要と寺内に関する言及内容と説明・紹介事項

執筆者	書籍名	概要	寺内に関する言及内容と説明ないしは紹介事項
瀧田貞一	『常滑陶器誌』 1912年	常滑窯業史の沿革とその功労者の顕彰	<ul style="list-style-type: none"> 常滑美術研究所（以下、常滑美研）における動植物の塑造や石膏型技法の教授 人体解剖学講義
中島浩氣	『肥前陶磁史考』 1936年	有田窯業史に関する百科事典	<ul style="list-style-type: none"> 巴里万国博覧会陶磁器出品協会への技師としての招聘 黄色い発色の釉薬の有田への導入 有田工業学校の窯の改築
牧口銀司郎	「帝国ホテルのスタレ煉瓦」 1957-1966年	ライト館建設における煉瓦製造の紆余曲折を回想	<ul style="list-style-type: none"> 帝国ホテル煉瓦製作所への招聘と、辞任するまでの詳細な経緯 寺内の焼成技法（有田式）
砥部町教育委員会	『砥部焼の歴史』 1969年	砥部焼窯業史の沿革とその功労者の顕彰	<ul style="list-style-type: none"> 砥部焼の品質向上に対する尽力の様子と振興策 《白磁観音坐像》の図版紹介 杉野丈助の碑銘「陶祖杉野丈助翁之碑」の揮毫 66歳での正六位の累進 淡黄磁の土による7体の観音像の制作 観音像の高値での売買
有田町	『有田町史 陶業編Ⅱ』 1985年	有田窯業史の沿革	<ul style="list-style-type: none"> 品評会の審査報告（6, 7, 10, 11回） 天草陶石の使用を解禁し促進させる発言の紹介（第7回）
吉田弘	『鯉江方寿の生涯』 1987年	鯉江方寿の生涯の伝記	<ul style="list-style-type: none"> 常滑美研設立に関する経緯 常滑美研における講義内容と生徒であった平野六郎の講義ノートの紹介 鯉江家の墓碑制作と墓碑の図版紹介

表 2. 研究論文の概要と寺内に関する言及内容と説明・言及事項

執筆者	論文・書籍名	論文概要	寺内に関する説明事項	寺内に関する未説明事項
金子一夫・伊沢のぞみ	「工部美術学校における彫刻教育の研究(1)」 1992年	<ul style="list-style-type: none"> 工部美術学校彫刻科の設置 学生募集 授業内容 廃校までの経緯 	<ul style="list-style-type: none"> 官費制の彫刻科に入学した理由 進歩表（成績表）の紹介 大理石・寒水石による作品制作 星取り法、人力ドリルの補助 	①ラゲーザの西洋彫刻の教授による寺内の作品への影響に関する考察
山田雄久	「寺内信一翁の有田磁業史研究」 1993年	<ul style="list-style-type: none"> 生涯の概観 『有田磁業発達史』の掲載 寺内の有田磁業研究書の概要と発表の流れの紹介 	<ul style="list-style-type: none"> 常滑美研における窯業との出会いによる実業教育の必要性の認識。瀬戸、有田、砥部における実地教育 	②陶彫制作において寺内が採用した技術に関する調査

金子一夫・伊沢のぞみ	「工部美術学校における彫刻教育の研究(2)」 1995年	・彫刻科の主な卒業生6人の生涯の概観	・生涯の紹介 ・窯業に転向した理由の解明（材料調達難、就職難） ・常滑美研設立の経緯と同美研における講義内容（石膏型技法、図画、動植物の塑造）の紹介 ・常滑における肖像彫刻の制作紹介（《杉江寿門像》、《伊藤周五郎像》） ・図版紹介（《白磁観音像》（有田工業高校）、《白磁観音像》（個人蔵））	
金子一夫	「日本の裸体彫刻第1号!?常滑のテラコッタ・ヌード」『芸術新潮』 1995年	・《裸婦像》、《鯉江方寿像》(内藤作)の紹介 ・内藤と寺内の常滑における功績紹介	・図版紹介《裸婦像》、用途に関する考察 ・同作品の技法（巻き上げ法）紹介 ・2作品の近代日本彫刻黎明期への位置付け	
金子一夫	『近代日本美術教育の研究 明治大正時代』 1999年	・明治から大正における西洋的美術教育の導入とその浸透についての考察	・「工部美術学校における彫刻教育の研究(1)」「(2)」との重複 ・小節において寺内と内藤の陶彫を紹介（内容は『芸術新潮』に発表したものと重複）	
田中修二編	『近代日本彫刻集成 幕末・明治編』 2010年	・幕末から明治にかけての日本彫刻史の紹介・考察	・《深川せい子像》の「ポーズ様式」に対する言及 ・図版紹介（《裸婦像》） ・《深川忠次像》についての言及・紹介 ・図版紹介（《観音像》（個人蔵））	
吉田朝子	「ラゲーザの教育とその影響 素材技法の側面から」2010年 付録「ラゲーザとその弟子たちに関する年譜」	・日本における西洋彫刻制作材料の代用品の開発について ・ラゲーザとその弟子たちの動向に関する年表	・『日本美術』に投稿した寺内の釉薬の生成法、大理石に含まれる成分の分析に関する報告の紹介 ・明治41（1908）年にメッシーナ海峡で大地震が起こった際の寺内とお玉の書簡のやり取り ・ラゲーザと弟子（寺内含む）の照合年譜の掲載 ・内藤に誘われたドイツ行きを断念した理由の紹介	
西野嘉章	「医学解剖と美術教育」 1997年	・西洋の医学解剖が日本美術教育に浸透する過程について	・平野六郎の日記に見られる、寺内らが教授した解剖学、画学、幾何学、遠近法の講義に関する紹介	

寺内信一年表

1863	文久 3	0	周防国吉敷郡宮野村（山口市桜島）の農家の次男として出生
1875	明治 8	12	同村の小学校の助教を務める
1876	明治 9	13	村長であった父親が事業に失敗し、兄と共に上京
1877	明治10	14	東京芝の松苗貫一郎塾に入り、主に漢学を学ぶ
1878	明治11	15	工部美術学校彫刻学科入学
1882	明治15	19	工部美術学校第二等卒業（未完成の大理石彫刻） 皇居御造営事務局に勤務
1883	明治16	20	建築方針の転換から、事務局退職を余儀なくされる 内藤陽三の推薦で常滑の鯉江高司の下で図画、塑造等を指導
1884	明治17	21	テラコッタ製日本裸体彫刻第1号制作
1886	明治19	23	常滑美術研究所の教員となる
1888	明治21	25	瀬戸の高等小学校（制陶手工科）に勤務
1896	明治29	33	瀬戸陶器学校訓導勤務
1898	明治31	35	佐賀の巴里万博陶磁器出品協会への転勤を勧められ、有田へ
1899	明治32	36	有田徒弟学校教諭等を勤める
1900	明治33	37	西松浦郡有田陶磁器品評会審査長（明治33～36、39、40年）
1902	明治35	39	第5回内国勸業博覧会西松浦郡陶磁器出品審査長 香蘭社や深川製磁を興した人々の肖像彫刻制作
1903	明治36	40	佐賀県立有田工業学校校長心得 セントルイス万国博覧会出品物審査長（有工銀牌受賞）
1904	明治37	41	佐賀県立有田工業学校分校校長就任
1908	明治41	45	有田工業学校石炭窯竣成（倒焰式二階石炭窯）
1911	明治44	48	清国（中華民国）の湖南高等工業学校で窯業指導（革命勃発）
1912	大正 1	49	中華民国湖南高等工業学校教員嘱託
1916	大正 5	53	愛知県西浦町にて帝国ホテルのタイル製造
1918	大正 8	55	愛媛県砥部工業徒弟学校教諭
1928	昭和 3	65	退職し、有田の李参平住居跡にて開窯（李荘窯業所）
1945	昭和20	82	没



図1 有田工業学校校長時代の寺内信一



図2 プロスペロ・フェレッティ《ラゲーザ肖像》東京国立博物館所蔵 1878-80年頃 油彩



図3 20代頃の内藤陽三



図4-1 松山政太郎《筋展図》愛知県立常滑高等学校旧百年館所蔵 1884年 石膏



図4-2 生徒作品と思われる鼻が欠損した象の陶彫作品 愛知県立常滑高等学校旧百年館所蔵



図5 寺内信一《裸婦像》愛知県立常滑高等学校旧百年館所蔵

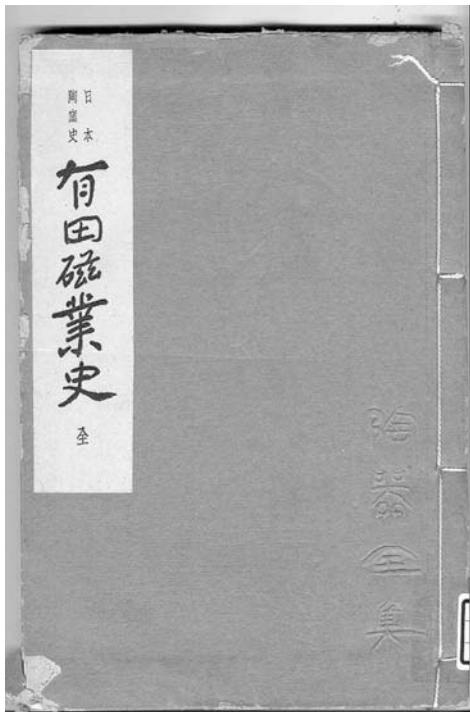
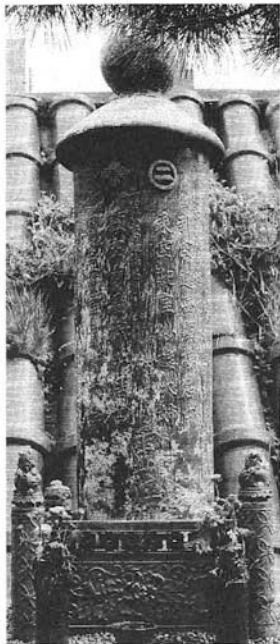


図6 寺内信一著『有田磁業史』



図7 瀧田貞一著『常滑陶器誌』掲載写真 寺内信一（左）と内藤陽三（右上）



方寿の作った鯉江家の墓

図8 鯉江家墓碑

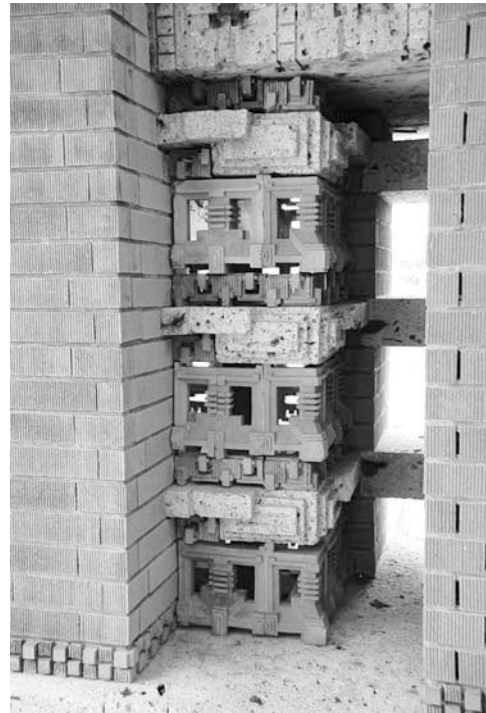


図9 旧東京帝国ホテル正面玄関に使用されたスタレ煉瓦 愛知県犬山市明治村



図10 《裸婦像》拡大した右臀部部分



図11 寺内信一《深川せい子像》陶 個人蔵

